



TITLE:

# 複素領域における非線型偏微分方程式の正則解の存在について(積分核の代数解析的研究)

AUTHOR(S):

田原, 秀敏

---

CITATION:

田原, 秀敏. 複素領域における非線型偏微分方程式の正則解の存在について(積分核の代数解析的研究). 数理解析研究所講究録 2006, 1509: 51-61

ISSUE DATE:

2006-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/58571>

RIGHT:

# 複素領域における非線型偏微分方程式の 正則解の存在について

上智大・理工 田原 秀敏 (Hidetoshi TAHARA)  
(Department of Mathematics, Sophia University, Tokyo)

本稿では、複素領域における非線型偏微分方程式

$$(E) \quad \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^m u = F\left(t, x, \left\{\left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u\right\}_{\substack{j+|\alpha| \leq m \\ j < m}}\right)$$

の正則解の存在について論じる。「今迄に得られている結果」の解説のみでなく、「どのようなケースが研究されずに残っているか」の部分もあわせて説明しておきたい。記述を簡単にするために、本稿では  $(t, x) \in \mathbb{C}^2$  の場合のみ論じる。

## 1. 方程式の定式化

$$m \in \mathbb{N}^*(= \{1, 2, \dots\}), (t, x) \in \mathbb{C}_t \times \mathbb{C}_x, N = m(m+3)/2,$$

$$Z = \{Z_{j,\alpha}\}_{\substack{j+|\alpha| \leq m \\ j < m}} \in \mathbb{C}^N$$

(ただし  $(j, \alpha) \in \mathbb{N}^2(= \{0, 1, 2, \dots\}^2)$ ) とし,  $F(t, x, Z)$  を複素変数  $(t, x, Z) \in \mathbb{C}_t \times \mathbb{C}_x \times \mathbb{C}_Z^N$  についての関数で次の条件をみたすものとする。

A<sub>1</sub>)  $F(t, x, Z)$  は原点  $(0, 0, 0)$  の近傍で正則;

A<sub>2</sub>)  $x = 0$  の近傍で  $F(0, x, 0) \equiv 0$ .

このとき,  $u(= u(t, x))$  を未知関数とする次の形の非線型偏微分方程式

$$(E) \quad \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^m u = F\left(t, x, \left\{\left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u\right\}_{\substack{j+|\alpha| \leq m \\ j < m}}\right)$$

を考える。次の2つの問題が基本的であろう。

問題1 方程式 (E) の解の存在 (特に正則解の存在) を論じよ。

問題2 方程式 (E) の解の一意性を論じよ。

## 2. 研究の現状

ここでは現時点 (1999年12月) での研究の状況を先に概観しておく.

### 2.1. 方程式の展開

$F(t, x, Z)$  が条件  $A_1), A_2)$  をみたすと仮定する. このとき,  $F(t, x, Z)$  を  $(t, Z)$  について Taylor 展開すると

$$(2.1) \quad F(t, x, Z) = a(x)t + \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} b_{j,\alpha}(x) Z_{j,\alpha} + \sum_{p+|\nu| \geq 2} g_{p,\nu}(x) t^p Z^\nu$$

と表される. ここでは

$$\nu = \{\nu_{j,\alpha}\}_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} \in N^N, \quad |\nu| = \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} \nu_{j,\alpha}, \quad Z^\nu = \prod_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} (Z_{j,\alpha})^{\nu_{j,\alpha}}$$

とした. また, 係数  $a(x)$ ,  $b_{j,\alpha}(x)$ ,  $g_{p,\nu}(x)$  はすべて原点  $x = 0 \in C$  の近傍  $D$  での正則関数で,  $D$  は  $j, \alpha, p, \nu$  には無関係にとれる.

簡単のため

$$(2.2) \quad C\left(x, t \frac{\partial}{\partial t}, \frac{\partial}{\partial x}\right) = \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^m - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} b_{j,\alpha}(x) \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha,$$

$$Du = \{D_{j,\alpha}u\}_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}}, \quad D_{j,\alpha}u = \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u,$$

$$R_2(t, x, Du) = \sum_{p+|\nu| \geq 2} g_{p,\nu}(x) t^p (Du)^\nu$$

とおく. このとき, 方程式 (E) は次の様に書ける.

$$(E) \quad C\left(x, t \frac{\partial}{\partial t}, \frac{\partial}{\partial x}\right)u = a(x)t + R_2(t, x, Du)$$

### 2.2. 方程式の場合分け

$$I = \{(j, \alpha) \in N^2; j + \alpha \leq m, j < m\},$$

$$I_+ = \{(j, \alpha) \in I; \alpha > 0\}.$$

とおく. (2.1) (または (2.2)) の係数  $b_{j,\alpha}(x)$  をもとにして 方程式 (E) を大雑把に分類すると, 次の3つの場合に分けられる.

Case(1) すべての  $(j, \alpha) \in I_+$  に対して  $b_{j,\alpha}(x) \equiv 0$ ;

Case(2) ある  $(j, \alpha) \in I_+$  に対して  $b_{j,\alpha}(0) \neq 0$ ;

Case(3) すべての  $(j, \alpha) \in I_+$  に対して  $b_{j,\alpha}(0) = 0$  だが, ある  $(j, \alpha) \in I_+$  に対しては  $b_{j,\alpha}(x) \neq 0$ .

### 2.3. 研究の現状

Case(1) の場合は, 方程式の線型部分  $C(x, t\partial/\partial t, \partial/\partial x)$  は  $C(x, t\partial/\partial t)$  という常微分作用素に他ならない. この場合は, 正則解については Gérard-Tahara [4], [6] で, 解の一意性については Tahara [7], [8] で詳しく調べられた.

Case(2) の場合は, 正則解については Gérard-Tahara [5] で調べられたが, 解の一意性については面白い結果は知られていない. Gérard-Tahara [5] で扱われたのは, Case(2) の内の  $l + \mu = m$  (意味は第 4 節に述べてある) のケースで,  $l + \mu < m$  のケースは未開拓に等しい.

Case(3) の場合は, 正則解については Chen-Tahara [1], [2] で一部論じられた. 解の一意性については 未開拓. Chen-Tahara [1], [2] で扱われたのは, Case(3) の内で 確定特異点もどきの場合のみで, それ以外のケースは未開拓である. Chen 氏によると, 中国の Wuhan (武漢) の学生がこの辺を何やら調べているそうである.

分かり易く表で表すと次のとおりである.

ケース	解の存在について (正則解など)	解の一意性について
Case(1)	Gérard-Tahara [4], [6]	Tahara [7], [8]
Case(2)	$l + \mu = m$ のとき Gérard-Tahara [5] $l + \mu < m$ のとき ???	???
Case(3)	確定特異点もどきの場合 Chen-Tahara [1], [2] それ以外のとき ???	???

注1) Chen-Tahara [1],[2] では, Case(1) を「nonlinear Fuchsian type」, Case(2) と Case(3) を「nonlinear totally characteristic type」と呼んでいるが, この命名が妥当かどうかは不明.

注2) Case(3) の確定特異点もどきの場合というのは, (2.2) の方程式の線型部分  $C(x, t\partial/\partial t, \partial/\partial x)$  が  $L(x, t\partial/\partial t, x\partial/\partial x)$  という形に書ける場合をいう.

注3) ??? は未開拓の意味. 未開拓とは「良い理論があるのか, どうしようもない場合なのか, それも不明」という意味である. ただし筆者は「未開拓の中に, 良い理論の成り立つケースが多くある」と信じている.

### 3. Case (1) について

Case (1) の場合について、結果をまとめておく。Case (1) ならば、すべての  $(j, \alpha) \in I_+$  に対して  $b_{j,\alpha}(x) \equiv 0$  が成り立っている。従って、方程式 (E) は次の様に書けている。

$$(E) \quad \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^m u - \sum_{j < m} b_{j,0}(x) \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j u = a(x)t + R_2(t, x, Du).$$

#### 3.1. 正則解について

正則解の存在については次の結果が基本的である。

$$C(x, \lambda) = \lambda^m - \sum_{j < m} b_{j,0}(x) \lambda^j$$

とおく。  $C(x, \lambda) = 0$  の根を  $\lambda_1(x), \dots, \lambda_m(x)$  とおき、これを (E) の特性指数と呼ぶ。

定理 1 (Gérard-Tahara [4])  $A_1, A_2$  および Case(1) の条件を仮定する。もしも  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\lambda_j(0) \notin \{1, 2, \dots\}$  が成り立つならば、方程式 (E) は原点  $(0, 0) \in C^2$  の近傍での正則解  $u(t, x)$  で  $u(0, x) \equiv 0$  となるものをただ一つ持っている。

#### 3.2. 解の一意性について

解の一意性については、最も基本的と思われる結果をひとつ掲げておく。

定義 1 次の 1), 2) をみたす関数  $u(t, x)$  の全体を  $S_{\log}(+)$  で表す。

- 1) ある  $\varepsilon > 0, \theta > 0, \delta > 0$  があって、 $u(t, x)$  は領域  $\{(t, x) \in \mathcal{R}(C_t \setminus \{0\}) \times C_x; 0 < |t| < \varepsilon, |\arg t| < \theta, |x| \leq \delta\}$  での正則関数であって、
- 2) ある正数  $a > 0$  があって、 $|\arg t| < \theta$  のもとで  $t \rightarrow 0$  のとき

$$\max_{|x| \leq \delta} |u(t, x)| = O\left(\frac{1}{|\log t|^a}\right)$$

が成り立つ。

ここで、 $\mathcal{R}(C_t \setminus \{0\})$  は  $C_t \setminus \{0\}$  の普遍被覆面を表す。

定理 2 (Tahara [7])  $A_1, A_2$  および Case(1) の条件を仮定する。もしも  $j = 1, \dots, m$  に対して  $\operatorname{Re} \lambda_j(0) < 0$  が成り立つならば、方程式 (E) に対し  $S_{\log}(+)$  の中で解の一意性が成り立つ。

注)  $t(\partial u / \partial t) = u(\partial u / \partial x)$  は、 $\lambda \equiv 0$  であり、 $u \equiv 0$  以外に  $u(t, x) = (x + a)/(c - \log t)$  (ただし  $a, c \in \mathbb{C}$  は任意定数) という形の解をもっている。この例では、 $\operatorname{Re} \lambda = 0$  であり、「 $S_{\log}(+)$  の中で解の一意性は成り立たない」。

#### 4. Case (2) について

Case (2) の場合について, 結果をまとめておく. もともとの方程式は

$$\left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^m u - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} b_{j,\alpha}(x) \left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u = a(x)t + R_2(t, x, Du)$$

であった. これに対して  $\mathcal{J}$  を次のようにおく.

$$\mathcal{J} = \{(j, \alpha); \alpha > 0 \text{ で } b_{j,\alpha}(x) \neq 0\}$$

##### 4.1. 結果 (正則解の存在定理)

$\mathcal{J} \neq \emptyset$  とする.  $\mu$  と  $l$  を

$$\begin{aligned} \mu &= \max\{\alpha; (j, \alpha) \in \mathcal{J}\} (\geq 1), \\ l &= \max\{j; (j, \mu) \in \mathcal{J}\} \end{aligned}$$

とおく. そして,

$$(4.1) \quad \sum_{j \leq l} b_{j,\mu}(0) \lambda^j = 0$$

という方程式を考える. もしも  $b_{l,\mu}(0) \neq 0$  ならば, この方程式は  $l$  次の多項式であり, その根として,  $l$  個の複素数  $\lambda_1, \dots, \lambda_l$  が決まる. 次の結果が成り立つ.

定理 3 (Gérard-Tahara [5])  $A_1), A_2)$  および

- 1)  $\mathcal{J} \neq \emptyset$ ,
- 2)  $l + \mu = m$  (よって  $l = m - \mu$ ),
- 3)  $b_{l,\mu}(0) \neq 0$  (つまり  $b_{m-\mu,\mu}(0) \neq 0$ ),
- 4) (4.1) の根について  $\lambda_1, \dots, \lambda_l \notin \{1, 2, \dots\}$

を仮定する. このとき,  $\phi_k(0) = 0$  ( $k = 0, 1, \dots, \mu - 1$ ) をみたす任意の正則関数  $\phi_0(t), \dots, \phi_{\mu-1}(t)$  に対して, 方程式 (E) は原点  $(0, 0) \in \mathbb{C}^2$  の近傍での正則解  $u(t, x)$  で 次の i), ii) をみたすものをただ一つ持っている.

$$\begin{aligned} i) \quad & u(0, x) \equiv 0, \\ ii) \quad & \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^k u \Big|_{x=0} = \phi_k(t) \quad (k = 0, 1, \dots, \mu - 1). \end{aligned}$$

##### 4.2. 証明のスケッチ

###### < 4.2.1. 方程式の reduction >

$u(t, x)$  の代りに

$$w(t, x) = u(t, x) - \sum_{k=0}^{\mu-1} \phi_k(t) \frac{x^k}{k!}$$

を考えることにすれば、初めから

$$(4.2) \quad \left( \frac{\partial}{\partial x} \right)^k u \Big|_{x=0} = 0 \quad (k=0, 1, \dots, \mu-1)$$

の場合のみ考えればよい。以下、(4.2) のケースを論じる。

$\mu$  と  $l$  の定義より、 $\mu \geq 1$  であり、方程式は次の形に書けている。

$$(4.3) \quad \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^m u - \sum_{j \leq l} b_{j, \mu}(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j \left( \frac{\partial}{\partial x} \right)^\mu u \\ - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m, \alpha < \mu}} b_{j, \alpha}(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j \left( \frac{\partial}{\partial x} \right)^\alpha u = a(x)t + R_2(t, x, Du).$$

今、 $U(t, x) = (\partial/\partial x)^\mu u$  とおいて、 $u$  に関する方程式 (4.3) を  $U$  に関する方程式に書き換えてみる。(4.2) のもとでは

$$u = D_x^{-\mu} U \quad \left( \text{ただし } (D_x^{-1} f)(t, x) = \int_0^x f(t, y) dy \right)$$

と表される。よって積分作用素  $D_x^{-\mu}$  を使うと、方程式 (4.3) は次の形に変換される。

$$(4.4) \quad - \sum_{j \leq l} b_{j, \mu}(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j U \\ + \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^m D_x^{-\mu} U - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m, \alpha < \mu}} b_{j, \alpha}(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j D_x^{\alpha-\mu} U \\ = a(x)t + R_2 \left( t, x, \left\{ \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j D_x^{\alpha-\mu} U \right\}_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} \right).$$

仮定より、 $b_{l, \mu}(0) \neq 0$  であったから、全体を  $-b_{l, \mu}(x)$  で割っておき、 $\beta = \alpha - \mu$  とおくと、 $\beta \in \mathbb{Z}$ 、 $j + \alpha - \mu = j + \beta \leq m - \mu = l$  であり、方程式 (4.4) は次の形に書ける。

$$(4.5) \quad \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^l U + c_1(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^{l-1} U + \dots + c_l(x) U \\ + \sum_{\substack{j+\beta \leq l \\ \beta < 0 \\ \text{finite}}} c_{j, \beta}(x) \left( t \frac{\partial}{\partial t} \right)^j D_x^\beta U$$

$$= a(x)t + R_2\left(t, x, \left\{\left(t\frac{\partial}{\partial t}\right)^j D_x^\beta U\right\}_{\substack{j+\beta \leq l \\ \text{finite}}}\right).$$

#### < 4.2.2. 方程式 (4.5) に対する結果 >

結局, 定理 3 は方程式 (4.5) に対する次の結果に帰着された. (4.5) の特性指数  $\lambda_1, \dots, \lambda_l$  を方程式

$$\lambda^l + c_1(0)\lambda^{l-1} + \dots + c_l(0) = 0$$

の根で定義する.

命題 1 (Gérard-Tahara [6]) もしも  $j = 1, \dots, l$  に対して  $\lambda_j \notin \{1, 2, \dots\}$  が成り立つならば, 方程式 (4.5) は原点  $(0, 0) \in C^2$  の近傍での正則解  $U(t, x)$  で  $U(0, x) \equiv 0$  となるものをただ一つ持っている.

方程式 (4.5) は  $D_x^{-1}$  という積分を含んでいる. 「この様な積分-偏微分方程式をどう扱うか」については, Gérard-Tahara [6] の Chapter 10 に書かれている.

### 5. Case (3) について

Case (3) の場合で「確定特異点もどきのケース」について, その結果をまとめておく. もともとの方程式は

$$\left(t\frac{\partial}{\partial t}\right)^m u - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} b_{j,\alpha}(x) \left(t\frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u = a(x)t + R_2(t, x, Du)$$

であった. ここでは次の仮定のもとで論じる.

$$c_1) \quad b_{j,\alpha}(x) = O(x^\alpha) \quad (x \rightarrow 0 \text{ のとき})$$

#### 5.1. 結果 (正則解の存在定理)

$c_1)$  のもとでは,  $b_{j,\alpha}(x) = x^\alpha c_{j,\alpha}(x)$  と書ける.  $\mathcal{L}(x, \lambda, \rho)$  と  $L(\lambda, \rho)$  を次の様におく.

$$\mathcal{L}(x, \lambda, \rho) = \lambda^m - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} c_{j,\alpha}(x) \lambda^j \rho(\rho-1) \cdots (\rho-\alpha+1),$$

$$L(\lambda, \rho) = \mathcal{L}(0, \lambda, \rho) = \lambda^m - \sum_{\substack{j+\alpha \leq m \\ j < m}} c_{j,\alpha}(0) \lambda^j \rho(\rho-1) \cdots (\rho-\alpha+1).$$

定理 4 (Chen-Tahara [2])  $A_1), A_2)$  および  $c_1)$  を仮定する. もしも, ある定数  $\sigma > 0$  が存在して,

$$(5.1) \quad |L(k, l)| \geq \sigma(k+l+1)^m, \quad (k, l) \in \mathbb{N}^* \times \mathbb{N}$$



(ただし  $N^* = \{1, 2, \dots\}$ ,  $N = \{0, 1, \dots\}$ ) が成り立つならば, 方程式 (E) は原点  $(0, 0) \in C^2$  の近傍での正則解  $u(t, x)$  で  $u(0, x) \equiv 0$  となるものをただ一つ持っている.

注) (5.1) のタイプの条件は ふつう 「Poincaré 条件」といわれる.

## 5.2. 証明のスケッチ

ここでは, 形式的べき級数  $f(t, x) = \sum_{i,j} f_{i,j} t^i x^j \in C[[t, x]]$  に対して  $|f|(t, x)$  と  $S(f)(t, x)$  (この  $S$  を shift operator という) を次で定義する.

$$|f|(t, x) = \sum_{i,j} |f_{i,j}| t^i x^j,$$

$$S(f)(t, x) = \sum_{i,j} f_{i,j+1} t^i x^j.$$

### < 5.2.1. 形式解の構成 >

$A_1), A_2), c_1)$  のもとでは, 方程式 (E) は

$$(5.2) \quad \mathcal{L}\left(x, t \frac{\partial}{\partial t}, x \frac{\partial}{\partial x}\right) u = a(x) t + R_2\left(t, x, \left\{\left(t \frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u\right\}_{(j,\alpha) \in I}\right)$$

と書ける. 左辺の  $\mathcal{L}$  の中では  $x \partial / \partial x$  がひとつの単位として入っているが, 右辺の  $R_2$  の中では  $\partial / \partial x$  のままである.

形式解を

$$(5.3) \quad u(t, x) = \sum_{k \geq 1} u_k(x) t^k, \quad u_k(x) \in C[[x]] \quad (k \geq 1)$$

とおき, これを 方程式 (5.2) に代入すると

$$(5.4) \quad \mathcal{L}\left(x, k, x \frac{\partial}{\partial x}\right) u_k = f_{k-1}\left(x, \left\{p^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u_p; 1 \leq p \leq k-1, (j, \alpha) \in I\right\},\right)$$

という形の漸化式が得られる. ここで  $f_0 = a(x)$  であり,  $k \geq 2$  のとき  $f_{k-1}$  は  $u_1, \dots, u_{k-1}$  から決まるものである. (5.4) は

$$L\left(k, x \frac{\partial}{\partial x}\right) u_k = f_{k-1}$$

$$+ x \sum_{(j,\alpha) \in I} S(c_{j,\alpha})(x) k^j \left(x \frac{\partial}{\partial x}\right) \left(x \frac{\partial}{\partial x} - 1\right) \cdots \left(x \frac{\partial}{\partial x} - \alpha + 1\right) u_k$$

と表されるので,  $f_{k-1} \in C[[x]]$  が既知ならば 解  $u_k \in C[[x]]$  は一意的に解ける. これより (5.3) の形の形式解が一意的に得られることが分かった.

### < 5.2.2. 形式解の収束性について >

もともとの方程式 (5.2) は

$$\begin{aligned}
 (5.5) \quad & L\left(t\frac{\partial}{\partial t}, x\frac{\partial}{\partial x}\right)u \\
 &= x \sum_{(j,\alpha)\in I} S(c_{j,\alpha})(x) \left(t\frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(x\frac{\partial}{\partial x}\right) \left(x\frac{\partial}{\partial x} - 1\right) \cdots \left(x\frac{\partial}{\partial x} - \alpha + 1\right)u \\
 &\quad + a(x)t + R_2\left(t, x, \left\{\left(t\frac{\partial}{\partial t}\right)^j \left(\frac{\partial}{\partial x}\right)^\alpha u\right\}_{(j,\alpha)\in I}\right)
 \end{aligned}$$

であった。これの優級数の方程式として、次を考えるのは自然であろう。

$$\begin{aligned}
 (5.6) \quad & \sigma Y = x \sum_{(j,\alpha)\in I} |S(c_{j,\alpha})|(x) Y \\
 & \quad + |a|(x)t + |R_2|\left(t, x, \left\{1^j S^\alpha(Y)\right\}_{(j,\alpha)\in I}\right).
 \end{aligned}$$

命題2 (5.1) の Poincaré 条件を仮定する。次が成り立つ。

(1) (5.5) の形式解を  $u(t, x)$ , (5.6) の形式解を  $Y(t, x)$  とすると  $u \ll Y$  が成り立つ。

(2) もっと詳しくは、

$$u = \sum_{k \geq 1, l \geq 0} u_{k,l} t^k x^l, \quad Y = \sum_{k \geq 1, l \geq 0} Y_{k,l} t^k x^l$$

とおくと

$$(k+l+1)^m |u_{k,l}| \leq |Y_{k,l}|, \quad (k, l) \in \mathbb{N}^* \times \mathbb{N}$$

が成り立つ。

この命題より  $u(t, x)$  の収束性を得るには  $Y(t, x)$  の収束性を言えばよい。

< 5.2.3.  $Y(t, x)$  の収束性について >

$Y(t, x)$  の形は

$$Y = \sum_{k \geq 1, l \geq 0} Y_{k,l} t^k x^l$$

となっていた。  $k \geq 1$  という条件を利用して  $Y(t, x)$  の収束性を示そう。

$$W(\rho) = \rho \sum_{k \geq 1, l \geq 0} Y_{k,l} \rho^{(2m+1)(k-1)+l}$$

とおくと、 $Y(\rho^{2m+1}, \rho) = \rho^{2m} W(\rho)$ ,  $W(0) = 0$  で「 $W(\rho)$  が収束すれば  $Y(t, x)$  も収束する」。従って問題は  $W(\rho)$  の収束性の証明にある。(5.6) の中の shift operator の処理には次の命題を使う。

命題 3 次が成り立つ.

$$S^\alpha(Y)(\rho^{2m+1}, \rho) \ll \rho^{m+(m-\alpha)} W(\rho) = O(\rho^m) W(\rho).$$

これと (5.6) から次を導くことは易しい.

$$\begin{aligned} \sigma \rho^{2m} W &\ll \rho C(\rho) \rho^{2m} W + |a|(\rho) \rho^{2m+1} \\ &\quad + |R_2| \left( \rho^{2m+1}, \rho, \{\rho^{m+(m-\alpha)} W\}_{(j,\alpha) \in I} \right). \end{aligned}$$

両辺から  $\rho^{2m}$  をキャンセルすると

$$\sigma W \ll \rho C(\rho) W + |a|(\rho) \rho + G_2(\rho, W)$$

という形の不等式を得る. ここで

$$G_2(\rho, W) = \frac{1}{\rho^{2m}} |R_2| \left( \rho^{2m+1}, \rho, \{\rho^{m+(m-\alpha)} W\}_{(j,\alpha) \in I} \right)$$

であり,  $G_2(\rho, W)$  は  $(\rho, W)$  の正則関数で その Taylor 展開は  $(\rho, W)$  について 2 次以上の項のみから出来ている. 結局のところ,

$$(5.7) \quad \sigma Z = \rho C(\rho) Z + |a|(\rho) \rho + G_2(\rho, Z), \quad Z(0) = 0$$

という関数方程式を考えると, その形式解  $Z(\rho)$  は  $W(\rho) \ll Z(\rho)$  をみたすことが分かる. よって 問題は  $Z(\rho)$  の収束性の証明に帰着された.

#### < 5.2.4. $Z(\rho)$ の収束性の証明 >

関数方程式 (5.7) に陰関数の定理を使うと「(5.7) は  $\rho = 0$  の近傍での正則解  $Z = Z^*(\rho)$  をただ一つ持っている」ことが分かる. 形式的に計算してみると, 形式解  $Z(\rho)$  はただ一つであることが分かるので, それは正則解  $Z^*(\rho)$  を展開したものではない. これで, 形式解  $Z(\rho)$  の収束性が証明された.

## 参考文献

- [1] H. Chen and H. Tahara : *On the holomorphic solution of non-linear totally characteristic equations*, Preprint 98/20, Institut für Mathematik, Potsdam, 1998.

- [2] H. Chen and H. Tahara : *On totally characteristic type non-linear partial differential equations in the complex domain*, Publ. RIMS, Kyoto Univ. 35 (1999), 621-636.
- [3] R. Gérard and H. Tahara : *Holomorphic and singular solutions of nonlinear singular first order partial differential equations*, Publ. RIMS, Kyoto Univ. 26 (1990), 979-1000.
- [4] R. Gérard and H. Tahara : *Solutions holomorphes et singulières d'équations aux dérivées partielles singulières non linéaires*, Publ. RIMS, Kyoto Univ. 29 (1993), 121-151.
- [5] R. Gérard and H. Tahara : *Holomorphic and singular solutions of nonlinear singular partial differential equations, II.* " Structure of differential equations, Katata/Kyoto, 1995 " (edited by Morimoto-Kawai), 135-150, World Scientific, 1996.
- [6] R. Gérard and H. Tahara : *Singular nonlinear partial differential equations*, Aspects of Mathematics, E 28, Vieweg-Verlag, 1996
- [7] H. Tahara : *Uniqueness of the solution of non-linear singular partial differential equations*, J. Math. Soc. Japan, 48 (1996), 729-744.
- [8] H. Tahara : *On the uniqueness theorem for nonlinear singular partial differential equations*, J. Math. Sci. Univ. Tokyo, 5 (1998), 477 - 506.